

ツイッターライブノベルズ

戦獄 ZERO

大槻エリナ編 中



SENGOKU PROJECT

ハッケボウ

これは現実なのか・・・。

ぞわり・・・。

エリナの背筋を、冷たいものが通り過ぎる。

ともかく、携帯を開いてみる。
おそろおそろ開いたそこには、予想に反して、今度は☆型なんかは表示されていなかった。
見慣れた液晶画面だ。

そこに、メールの着信表示が1件、点滅している。

差出人は・・・不明。
普段ならこんな怪しいメールは開かずに削除だ。

スパムの可能性が高いし、下手をするとウイルスなんかが入っている可能性もある。

しかし、この状況下なら、開いてみるしかないだろう。

【ハッケボウに移動しました。センゴクのモンの通過のためにはヒトガタが必要です】

そこには、そう書かれていた。

ハッケボウ？
センゴク？・・・なにこれ???

意味がさっぱり、わからない。

今の状況に何やら関係あるように思えるが・・・
メールの本文の意味もわからないが、差出人の意図がわからないのが更に不気味だ。

エリナは、自分の中で急速に不安感が増大していくのを止める事が出来なかった。

落ち着け・・・落ち着かなければ・・・困った時、普段ならどうする？

そうだ。誰か・・・誰か、いないの？

エリナは、恐る恐る、声を出してみる。



「すいませ～ん」

声がかすれてしまっている。我ながら、情けなくなる程の、か細い声だ。

咳払いをして、改めて声を出す。



「すいませ〜ん・・・誰か、いませんか〜？」

声はしかし、反響するでもなく、柱の立ち並ぶ空間に吸い込まれていった。

少し、反応を待ってみる。

が、耳をすませてみたが、何も応えは返って来ない。

そういえば、やけに静かだ。

人の気配も・・・しない。

もう一度、声をかけてみたが、結果は同じだった。

改めて周囲を見回してみたが、前も後ろも、右も左も同じ風景・・・。

柱が延々と立っているだけ。

手がかり

何度か振り向き 振り向きしている間に、エリナはいつしか、はじめにどちらを向いていたかすらわからなくなってきた。

この風景はどこまで続いているんだろう・・・。

ちょっと歩いてみよう・・・
もしかしたら、今呼びかけた声の届かなかった場所に誰がいるかもしれないし、先に進めば何か違った景色が見えるかもしれない。

そう思って、エリナは、恐る恐る歩き始めたのだが、もしかしたら動かない方がよかったか・・・と、ちょっとこの行動を後悔した。

前に進んでも、相変わらず柱が延々と立ち並ぶ風景は変わらない。

右も左も同じような柱が立っていて、気を緩めると自分がどの方向から歩いてきて、どちらに行こうとしていたのかも、わからなくなるのだ。

高い所から俯瞰できれば・・・
とも思いつくが、それにはこののっぺりとした、柱を登って見なければならぬ。
とっかかりすらない、つるつとした柱のその表面を登っていくのはとてもではないが無理そうだ。
加えて、柱を登るほどエリナは運動神経が良いわけではない。

歩くしかないか・・・。

溜息を付き、見上げていた視線を前に戻したエリナは、ふと、あるものに気づく。

何も無い、朱色の柱だと思っていたのだが、今、目の前にある柱に、何か小さな、白いものがあるのを見つけたのだ。

それは、エリナの身長よりやや高め・・・かろうじて手が届くあたりにあった。

なんだろう・・・？

その柱に近づき、薄暗い中を、エリナはじっ、と目を凝らして見る。

白いもの・・・それは、一片の紙きれだった。

紙は縦長で、大きさは丁度、一般的に使われる封筒くらいのサイズだ。

やや黄ばんでいるようにも見える。古いものなのだろうか・・・。

よく見ると何か文字のようなものが書いてある。

何が書いてあるのか・・・再び目を凝らしてみるのだが・・・これが、よく判らない。

判らない、というのは小さくてそれが読めないという事ではない。

確かに書かれた文字自体は大きなものではない。
漢字らしきものが紙の真中に縦に一行、紙の大きさに比較すると、大きく書き込まれてはいるのだが、その内容自体意味がよくわからないのだ。

急？令？・・・そう読める文字があるのは、見える。

しかし、あとはエリナが見たこともない、読めない文字なのだ。

およそ日常生活で使われる頻度の漢字ではないのだ。

一体、どういう意味の文章なのか・・・。

ふと、エリナはこの紙切れに似たものを見た事があるのに思いあたった。

思い当たると同時にまた、背筋にぞくり・・・とするものが通り過ぎる。

殺気

縦長の紙に書かれた漢字の列・・・

これはもしかして、所謂「おふだ」なのではないか？！

心霊番組とかで見かけたの、確かこんな感じじゃなかったっけ・・・

そう、悪霊退散、みたいな・・・？

知識がないので断定は出来ないが、そうかもしれない。

思い過ごしなだけで、違うかもしれない。

エリナは特別靈感が強いわけでもないし、
そういった類のものを軽々と信じたりするタイプではないが、
さすがにおぞましく感じる気持ちが湧き上がるのを押さえる事ができない。

周囲の空気がふいに、どんよりと濁ったような・・・

意識する事で、あり得る筈がない、そんな気になってしまう。

気をつけてみてみれば、それ・・・

「おふだ」はどの柱にも似たように張られているではないか！

まるで柱一本一本の名札のように、丁寧に、それは張られていた。

薄気味が悪い・・・これらが「おふだ」だとすれば、

ここはそういう、何か嫌な「もの」がものを祭る、

あるいは封じ込めるような場所だということか。

自分の想像に、無意識にエリナは息を飲む。

自分の喉の鳴るその音が、やけに大きく聞こえて慌てる。

ここにいる「なにか」に聞かれては大変な事になる・・・

そんな想像もついつい、してしまう。

きっと、今自分は、ここの異様な雰囲気呑まれているのだ・・・

気をしっかり持たなければ・・・。

エリナは気を取り直す。

ともかく、冷静に・・・。

落ち着かなければ、自分の想像に押しつぶされてしまいそうだ。

そうだ。ここが何処なのかをを知るヒントが、あの「おふだ」にあるかもしれない。

いや、そもそも、あれが本当に「おふだ」かどうかは判らないではないか。

勝手に決め付けてしまっただけは、大切な事を見落としてしまうかもしれない。

さすがにそれを剥がすのは躊躇われるが、もう少し近くで観察してみなければ・・・

エリナは思い切ってそれ・・・「おふだ」に近づいた。

「おふだ」は半端に高いところにある。

それを見る為に、エリナは背伸びをしつつ、柱に寄りかかるように手を添えた。

柱に触れた瞬間、エリナはきゃっと、悲鳴を上げて、その手を引っ込める。

柱は木でできているのか、それなりに硬く乾いた感触で、

その点を見た通りのイメージだったのだが、なんだか変に、生あたたかかったのだ。

そう、これは丁度、人肌のような・・・。

ざわり・・・とまた、背筋に悪寒が走った。

その時、不意に「おふだ」が、かさり、と動いた。

風

エリナは思わず、柱の側から後ずさる。

(風・・・？風が吹いて、それで「おふだ」が揺れたの？)

いつの間にか、わずかに風が吹いている。

それにあおられて、「おふだ」がかすかに揺れたのだ。

空気の流れに合わせて、「おふだ」が鳴る。

かさ、かさと言を立てて。

わずかな風・・・

それによって、目の前の柱に張ってある「おふだ」が揺れている。

風は奥の方・・・

正確にはエリナから見て、やや左奥から右に向けて吹いているようだ。

かさり・・・。

手前の「おふだ」に続いて、右横の柱の「おふだ」が揺れたのだ。

更にその奥の柱の「おふだ」もかさり、と言をたてる。

かさ、かさ・・・。

右側の奥へ、奥へと風の流れに沿って、「おふだ」のざわめきが去ってゆく。

そして、その反対側・・・風上にあたる方向からも、再び、小さな音が聞こえてきた。

かさ、かさ・・・

風が、また吹いてきたのだろうか・・・

かさ、かさ、かさ・・・

かさかさかさかさかさ・・・

遠くからこちらへ、風が通るに従って、順番に奥から「おふだ」が鳴ってくる。

それは、単に風で紙が鳴っているだけなのだが、
なんだか・・・音とともに「何か」が近づいてくるように感じてしまう。

感じ・・・。

そう・・・そう感じる、だけだ・・・それだけなのだが・・・。

第一、「何か」って何よ・・・と、エリナは自分の想像を笑う。

紙の鳴る音ひとつひとつは、ごくささやかなものだ。

しかし、それが幾つも重なりあい、連続音となると、それなりの圧力を伴なう。

風に揺れる、木々のざわめきのように・・・

かさかさかさかさかさ・・・

うねり、擦れあい、揺れる、木の葉のように・・・

かさ、かさ……

……気の、せい？

ごとっ

いや……気のせいじゃない！
いま、確かに音が……
それも、ほんのすぐ近く？！
そう。それは……この目の前の柱の……
柱の、裏、あたりから？

ごと、ごとり……

また聞こえた……！

間違いない、この柱の真裏だ。
柱をはさんでいるとはいえ、その音の発生源からエリナとの距離は……
たぶん、3メートルもない。

・・・・・・・・あはあはあはあはあ

・・・・・・・・あはあはあはあはあ

これ・・・・・・・・！
もしかして、息使い？
何か・・・・・・・・いや、
誰かが、
そこに・・・・・・・・いる・・・・・・・・！！



「そ、そこに誰か・・・・・・・・いる、の??」

思わず、そう問いかけてから、エリナはハッとする。

問いかけに答えが返ってこなかったから、ではない。

声をかけて、よかったのだろうか・・・・・・・・という不安めいた疑問がすぐに頭に浮かんだのだ。

声をかけるという事は、相手の反応をうかがうと同時に、相手にも自分の存在と位置を知らせる事にもなるのだ。

柱の向うにいる誰か・・・・・・・・誰か、というよりも、そいつをエリナは「何か」という捉え方をすでに本能的にしているのだが・・・・・・・・もし、それがエリナに危害を加えるような存在だったとしたら・・・・・・・・。

エリナは声をかけると同時に、自分のうかつさを呪った。

そして、こういう時の感は、何故だかよく当たってしまうのだ。

返事はやはり、ない。

しかし、その代わり今まで聞こえていたあの喘ぎ声が、ぴたりと止まったではないか。

それはエリナにとって、明確な返事よりも恐ろしい反応だった。

エリナは必死に耳をすますが、もう今は何も聞こえてこない。

だが、そこに何かがあるッ！？

間違いない。そいつはこちらの様子をうかがっているのだ。
エリナと同じに、耳をすませている・・・
ジッと・・・
息を殺して・・・
この柱のすぐ、裏で・・・

かり・・・かたり・・・

また！

いま、間違いなく、小さな音がした！

柱の裏にいる何かが、微かに動いたのだ。
今度は小さな、金属質の音だった。
エリナは全神経を、耳に集中させる。

かたり・・・

ず、ずずずず・・・

続いて、何かを引きずるような、こすれるような音が・・・。

たとえば座った姿勢から、柱に身をかけつつ立ち上がろうとしたら、
こんな音がするんじゃないだろうか？

柱に身をもたせかけつつ、そのこすれるような音は、ゆっくり、ゆっくりと移動している・・・。

音は、移動している・・・こちら側に向って！！

音の正体

この時点で、ようやくエリナは我に戻る。

逃げなければ・・・！！

正体もその意図も判らないが、
相手は明らかにエリナが存在を認識しているにも関わらず、
無言のまま、こちらへ近づこうとしているのだ。

とにかく、距離をとった方がいい。

素早く動くべきなのだろうが、
その動きそのものが相手を刺激しそうで、思い切って動けない。

落ち着け・・・。

今日、何度目かの同じ呪文を心の中で呟いたエリナは、ゆっくりと、後ずさる。

とても、怖い。

思い切り、悲鳴を上げて逃げてしまいたい。

だが、逃げれば柱の裏の何かもまた、
それ以上の勢い、速さで追いかけてくるかもしれない。

恐怖に押しつぶされて、今すぐにでも絶叫してしまいそうだった。

だが、一方で、何がいるのか確かめなければ・・・と、
冷静に今の状況を見ている自分もいる。

冷静？いや、違う。色々な気持ちや考えが、物凄いスピードで浮かんで消えてゆく。

そうだ・・・自分は今、単に混乱しているのだとエリナは思う。

いやいや、混乱していると意識できるという事は、
やっぱり私は冷静なのか・・・とも思なおす。

だが、エリナは間違っている。

非現実的な空間・・・。

得体の知れない「何か」の接近・・・。

彼女は実際に体験している事に、リアルを感じられなくなっているのだ。

その結果、本能が訴えている危険信号を正確に受け入れられていない。

結果、危険から距離をとるべき貴重な時間を、エリナは無為に浪費した。

それが視界に現れた時、エリナはようやく柱から数歩離れたところにいるに過ぎなかった。

柱のむこうから・・・

ぺたり・・・

真っ黒な何やら細いものが見えた時も、エリナの動きは緩慢だった。

あるいは、彼女の理性は、目の前で起こっている事を受け入れる事で、正気を保てなくなるのを防ぐため、無意識にリミッターをかけているのかもしれない。

と、闇が凝固したような、真っ黒な染みのような細いものの先端は、更に細く枝分かれし、ぺたり、と柱の表面に貼りついた。

一本、二本・・・枝分かれした細いもの・・・。

それは、「指」だった。

真っ黒い指が、柱の表面に爪をたてる。

そこを基点に、ぐいっと腕から先が柱から引き出される。

ぬっ・・・と、真っ黒な塊が、姿をあらわした。

滲む影

スイカほどの大きさの黒い塊が、柱のむこうでゆらゆらと揺れる。

水に垂らした墨汁のように、その輪郭が曖昧に滲んでいる。

初めて見るはずなのに、この状況はどこかで・・・エリナは唐突に、思う。

暗く、黒く、もやもやと、あやふやでハッキリしない・・・。
じわり、じわりと蠢くもの・・・。

そうか、とエリナは合点する。
彼女が時折、感じてきた正体不明の不安・・・

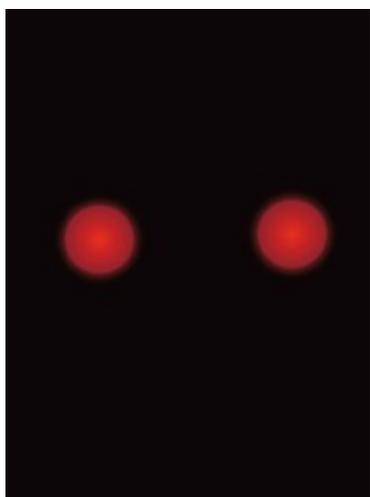
それがもし形になったとしたら、きつとこんな感じに違いない。
ぽこん・・・と、胸の奥で「泡」のように唐突に湧き出るそれが
浮かび上がる音が聞こえたような気がした。

まさに泡がはじけるように、目の前の黒い塊の中に、
不意に真っ赤な光がふたつ、ぱかり、と生じた。

ゆらゆらとゆれる黒いもののなかに、点滅する赤いふたつの光点・・・。
ぱかり・・・ぱかり・・・時折、点滅を繰り返す。
その周期はつまり・・・まばたき！？

うつろにさまよったそれは、やがてエリナのいる方向にむく。

不意に、その光点とエリナの視線が交差する。



目、が・・・

あ、っ、た・・・・！？

伸びる腕

怖い・・・！！

さすがに恐怖は感じているが、エリナは動かない。

いや、動けないのだ。

今度は逆に、金縛りにあったように体が動かないのだ。

視線も、そいつから離せなくなってしまうている。

ゆっくりと「それ」が柱から出てくる。

曖昧でありつつも、ヒトの形をした何かが柱から全身をあらわす。

ゴテゴテとした、真っ黒な染み。影のようなもの・・・。

体が、動かない・・・。

紅い、目玉・・・。

怖い・・・。

どンドン、近づいて・・・。

それが、来る・・・。

声が出ない・・・。

すぐ、側まで・・・

その手が、ゆるりと伸びて・・・

エリナの方に伸びてきて・・・

腕を・・・・

エリナの腕を、がしっ！と、つかむ！

生暖かい手が、エリナの腕をじっとりと、
しかし、かなり強い力で、確実につかんでいた！

腕の力はみるみる増してゆく。

誰か、助け・・・

締め付けられる痛みと、それ以上に感じるのは、ジリジリとした熱さが！

声が、出ない・・・。

じっとりと湿った感触なのに、肌が焼け焦げてゆくような痛みが！

真っ赤な目玉が、エリナを射すくめる。

気づけばエリナの瞳には涙が溢れていた。

はあッ、はあッ、はあッはッはッはッ・・・！！

すでに、生臭い息がエリナの顔に吹きかかる程に、側に来ていた。



「逃げろ！馬鹿ッ！！」

不意に耳元で大声が響き、体が背後に引っ張られる。

その瞬間、今までかかっていた呪縛がはずれ、エリナは絶叫する。

※続きはSENGOKU-MON-大槻エリナ（下）にて
無料でお楽しみいただけます。

尚、この話はノンフィクションです。
登場人物である大槻エリナは実在する人物です。
ツイッターで大槻エリナの「今」をご覧ください。

http://twitter.com/otsuki_erina

http://gree.jp/otsuki_erina